

中東イスラーム研究拠点

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」主催

研究会「Ralph Kauz氏を迎えて」

平成 22 年 11 月 14 日（日曜日）15:00～17:00 AA 研 304 室

“Ming China as reflected in the ‘Khatāynameh of ‘Alī Akbar Khatā’ī”

Ralph Kauz (Bonn University / Kwansei Gakuin University)

コメンテーター：田口宏二郎 (追手門学院大学国際教養学部)

ペルシア語による明代中国誌である『ハターイ・ナーマ (中国の書)』は、15・16 世紀の西アジアと中国の関係を知る上で、極めて重要な文献である。著者、ハターイーは 1516 年にペルシア語でこの書を書き上げ、1520 年頃オスマン朝のスレイマンに献呈した。そののちオスマン・トルコ語訳が出版されている。カウツ氏は、この書に関する研究史を紹介し、章構成を示し、この書に関するいくつかの謎についてその見解を示した。そして、具体的な記述の例として、居酒屋と歌い手に関する第 11 章を取り上げた。

コメンテーターの田口氏からは、明代史における非漢文史料の重要性が指摘され、『ハターイ・ナーマ』もその一つと見なすことができるとした。しかしながら、氏は、一方で、カウツ氏が紹介した第 11 章のような記述は、明代史の常識から考えるとありえないような記述であることも明らかにした。

全体として見るならば、カウツ氏が述べるように少なくともペルシア語文化圏やオスマン朝において中国に対してどのようなイメージを持っていたかを明らかにすることが、この書から可能である。この書をめぐって、中国史研究者との共同研究の豊かな可能性を示した研究会となった。

(文責：近藤信彰)